

---

# タ・ケ・ル

高遠響

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

タ・ケ・ル

### 【Nコード】

N1190Y

### 【作者名】

高遠響

### 【あらすじ】

タケル小学校6年生。サッカー好きの勉強嫌い。なんてことはない少年だが、彼には特殊な能力があった。彼はテレパシスト。親友のトーマだけがそれを知っている。

ある日タケルは琴音という美少女と出会う。どうやらこの美少女、訳ありのようだ……。

タケルとトーマと琴音。三人の少年少女のひと夏の冒険物語。

## 祭りの夜に&1 t ; 1 & g t ;

### 1 . 祭りの夜に

「じゃあ、お楽しみの通知表を渡すぞお！」

担任の成田先生が大声を張り上げた。途端に六年一組の教室の中は「え〜」とも「ぎゃああああ」とも「はあああ」ともつかぬような子供たちの声で満ちあふれた。

「夏休みだからって浮かれて遊びまわっている場合じゃないぞお。この通知表をありがたく受け取って、夏休みの過ごし方をよおく考えるようにな！」

ひよろつとしていて銀ぶち眼鏡の成田先生はにやにや笑いを浮かべている。いつもにこにこしているのはいいが、こういう時は憎らしい。

成田先生は名簿順に名前を呼び始めた。

タケルは机の上に顎ゝあごゝを置くと、どんよりとした顔で前を見る。

「川上タケル！ おい、タケル！」

成田先生の非情な声が飛んでくる。力行なんてすぐ回ってくるから大嫌いだ。

タケルは力なく立ちあがると、見るからに嫌そうな顔でのろのろと前に出た。

くすくすと女子の笑い声が聞こえる。

「見る前からそうがっかりするなよ。頑張ったよ、うんうん、体育はな」

成田先生は笑いながら通知表を目の前に差し出した。

「二学期は運動会があるじゃないか！ お前の華麗な走りを見せてやれ！ しっかり夏休みに鍛えとけよ。宿題をしてからだけだな」

「あ〜〜もう！」

タケルはひつたくるよう通知表を受け取ると、どすどすと大股で自分の席に戻って勢いよく座った。また女子がくすくす笑う。二つ折りの通知表を少しだけ開けて、顔を突っ込むようにして見る。

「……………」

体育は全項目「よくできる」だ。これは予想通り。問題はその他だが……………」

無情にも五段階のど真ん中から下がずらりと並んでいる。社会に至っては全ての項目が一番下と来ている。予想通りと言えば、予想通りではあるのだが……………」

「……………まずい。これはまずい」

パタンと通知表を閉じると、机の上に置き、その上に頭を乗せた。教室のそこかしこから、タケルと同様の焦りの“声”や、嬉しそうな“声”が波のように聞こえてくる。

やった！ これでゲームソフト、ゲットだ！

わあああ、こんなの見せたら母ちゃんに殺されるかも。

やばい！ やばすぎる！！

びみよくな内容だあ……………。塾でなんて言われるかなあ。

タケルはその“声”をぼんやりと聞きながら大きなため息をついた。多分俺が一番やばいんじゃない？ 心の中でそう呟く。

軽やかなチャイムが鳴り響き、教室の中のざわめきは一層大きくなった。

「なんだかんだ言っても、小学校最後の夏休みだ。皆、楽しんでこいよ。事故と病気には十分気をつけてな！ 起立、礼！」

成田先生の言葉を合図に教室のにぎやかさは最高潮に達した。

タケルはやけくそのようにカバンの中に通知表を突っ込んだ。そして勢いよく椅子を机の中に入れた。

「タケル！ どうだった？」

クラスメートがばんつと勢いよくタケルの背中を叩く。

「いつてえ！」

タケルは大げさに痛がって見せた。

「骨折れた！」

「お前の骨がこれくらいで折れるか！」

友人はけらけらと笑う。

タケルは体育だけが取り柄というだけあって、それほど大柄ではないが獵犬のようにしなやかで軽やかだった。確かに背中をはたかれたくらいで骨が折れるはずもない。足も速いので、クラスの男子の中では一目置かれている。地元のサッカークラブに入っていて、レギュラーとして活躍していた。日に焼けた顔に、強い生命力を感じさせる瞳が印象的な少年だった。

「で、どうだったってば」

「聞くな……」

タケルは顔をしかめて見せた。友人はにやにや笑いながら頷いた。「いいんじゃない？ 天は二モツを与えずって言うじゃん」

「なんだよ、それ」

「それで勉強まで出来たら、嫌われてるってこと」

「バカってことじゃねーか！」

「そうとも言っな。じゃあな！」

友人はそう言いながら走って教室を出た。その後ろ姿にタケルは苦笑いしながら手を振った。そして、教室の一番奥の席に向かって叫ぶ。

「トーマ！ 帰ろっぜ」

「うん」

自分の席で荷物をまとめていた山本冬馬、トーマはゆっくりと立ち上がる。小柄で色白で眼鏡をかけているトーマは、タケルとは対照的に、見るからに秀才といったところだ。実際、トーマの成績は恐らく学年で一番に違いないとタケルは信じている。タケルを始め、クラスの何人かの男子はわからない問題があるとトーマに教えても

らう事にしている。トーマの教え方は先生よりも上手いというのがもっぱらの評判だ。わかりやすいし、根気よく教えてくれるし、なによりもうれしいのは、自分の親のように「なんでこんなのがわからないの！」などと言わないところだ。成田先生はトーマの事をプチ孔明などと呼んでいる。ちなみに孔明というのは三国志というやたら長い物語に登場する中国の賢人である。それくらい賢いのに、それを鼻にかけることなくいつもニコニコしているところが、いい。意外な事にトーマはタケルの親友なのである。見た目も中身もまったく違うのに、しょっちゅう一緒にいるので、二人は「オセロ」とクラスメートから呼ばれていた。勿論、黒い方がタケルで白い方がトーマだ。ちなみにオセロをトーマとタケルがすると、ほとんどパーフェクトでトーマが勝つというのは言うまでもない。

「なあなあ、トーマ」

タケルは少し声をひそめる。

「天は荷物を与えずって何？」

トーマは一瞬目を見開き、それからパチパチ瞬きした。

「天は荷物って……それを言うなら『天は二物>にぶつくを与えずだよ。秀でた才能をいくつも持つてるモンじゃないってこと』」

「……やっぱりバカってことじゃねーか」

タケルが唇を突き出して不服そうにぼやくので、思わずトーマは笑いだした。

「運動神経いいって充分だと思うけど」

「どーせ俺は筋肉バカですよ。脳ミソの代わりに、カニミソが詰まってるんだい」

タケルはむくれた。

「カニミソ……って」

「高級なんだぞ、どうだ参ったか」

無意味にいばるタケルを、トーマはさらりといなす。

「……なんで高級か知ってる？ ちょっとしか入ってないからだよ」「やっぱりバカってことじゃねーかあああー！」

タケルはトーマの肩をつかんでゆさぶった。

「あはは……ごめんごめん。帰ろ」

「おっ」

二人は並んで教室を出た。

校舎の外は一瞬めまいがしそうなくらい暑い空気と日差しと、セミの声であふれている。

学校の外の道路は家へ向かう子供でいっぱいだ。皆足取りも軽くうきうきしている。

「あゝ、やっと夏休みだよお」

タケルは太陽を見上げて伸びをした。ようやく教室に閉じ込められる時間から解放されると思うと、青空のように爽快な気分だ。タケルにとって人のたくさんいる空間に閉じ込められるという状況は拷問以外のなにものでもない。それには勉強嫌いという理由とは別に、ある特別な事情があるのだが。

「今日の夜、泊まってもいいって?」

強い日差しを避けるように黄色い帽子を目深にかぶっているトーマは少し顔を上げると眩しそうな目でタケルを見た。

「うん。母ちゃんがいいって。……それにしても大変だよな、看護師さんって」

トーマの母親である咲子はシングルマザーで、大きな病院で働いている看護師だ。夜勤が入るとトーマはよくタケルのうちに泊まる。トーマが生まれるまでは救命救急の仕事もしていたそうで、相当なやり手のようだ。今でこそ病棟勤務だが、責任の重い立場にあるようでもとても忙しい。それでもトーマにとっては尊敬すべき自慢の母であり、タケルにとっては「いつもクールでカッコいい、超イケてるおばちゃん」だ。

タケルとトーマは保育園の乳児クラスからの付き合いで、ほとんど兄弟のようなものだった。家も近いのでしょっちゅう行き来している。母親同士も仲が良い。タケルの母親、佳奈のさっぱりしたあけっぴろげな性格に、咲子は癒されるとよく言っているそうだ。お

互いに色々な相談をしたりして、今では家族ぐるみで付き合っている。

タケルの家は自営業で必ず誰かが家にいる。人の出入りが多いので、トーマを預かるくらいタケル一家にとってはなんでもない。それに佳奈はタケルと全く違う性格のトーマのことがお気に入りなのだ。いつも犬みたいに駆けずりまわっているタケルと、物静かで見立たない、とんでもなく真面目な秀才のトーマ。見ていると飽きないらしい。

「そういえば、今日の夜の高乃城 たかのしろ 祭、行ってもいいつてさ」

「え、本当？」

トーマはぱつと目を輝かせた。

高乃城祭というのは高乃城市の中心にある大きな公園、高乃城址たかのしろあと 公園で毎年開かれている祭りだ。この辺りでは唯一の夏祭りだ。この祭があつてようやく夏が来たという実感が湧く。

「トーマと一緒にだったら安心だからって」

鉄砲玉のようなタケル一人では何をやらわからないが、トーマと一緒にいたらちゃんとブレーキをかけてくれると言ったところだ。

「うーん、夏休みっていいよな」

タケルはもう一度嬉しそうに伸びをした。

> 続く <



ただいま！ と大声で家の扉を開けると、妹のアユミがペタペタと足音を立てながら廊下を全速力で走って来た。

「いにい〜〜！」

「おお、アユ〜」

タケルは手にしていた上靴袋を放り投げて、駆け寄ってきたアユミをぎゅっつとハグした。

「なんだ、帰ってたのかあ」

ぶにぶにのほっぺたをつんつんすると、アユミはにい〜つと笑った。

妹のアユミはまだ二歳で、保育園に通っている。ふわふわの髪の毛を頭のでっぺんでチヨロリンツとくくっついて、走る度にそのチヨロリンがぶかぶか揺れる。やたら人懐っこい性格で、タケルを見上げる瞳からはいつも“好き好きビーム”が出ているような気がしてしょうがない。まるでハムスターかミニウサギみたいだとタケルは思っている。歳が離れているからか、タケルはこの妹が可愛くて仕方ないのだ。時々、宿題のプリントを派手に破かれたりするが、どうせ適当にしかやらないプリントである。どうってことはない。もっとも、その後、二人して母親に怒られるのだが……。

タケルはアユミをどっこいしょっと抱き上げる。背中にランドセル、前に妹、なんともかさの高いことだ。

廊下の奥の扉からひょいっと父親の哲司が顔を出した。

「あれ、父ちゃん。いたの？」

「ああ。近所の仕事だから昼ご飯は家で食べようと思って。もう少ししたらまた行く」

哲司は腕の良い大工だ。口数は少なく余計な事はほとんどしゃべらないが、荒っぽい口をきくこともない。後輩の話にもよく耳を傾け、相談にも乗ったりしているようだった。そんな哲司を慕って、

家にはしょっちゅう大工仲間が出入りしている。絶大な信頼を得ているようだ。

日に焼けてがっちりした身体の、見た目はかなりいかつい男だが、意外なくらいに優しい目をしている。アユミには勿論、タケルに対しても穏やかで滅多に怒る事はない。しかし、何か悪い事をした時はどうにも逆らえない強い瞳で見据えられる。そんな時はまるで心の奥底まで見通されるような気がして、哲司の前では絶対に嘘はつけないとタケルはいつも思う。

タケルは妹を哲司に渡した。

「なんでアユミ帰ってんの？」

「今日は昼から母ちゃんの家にいるからって」

「あ、そうだった」

言われてみれば、高乃城祭に出店する町内会の準備で、近所の人何人か家に来ると言っていたような気がする。

タケルはでかい声でわめきながら台所に入った。

「あゝ、腹減った！」

台所では母親の佳奈がちょうどそうめんをゆがいていた。ショーカットで、スラリとした後ろ姿だけを見ていると二人の子持ちにはとても見えない。学生の頃は陸上をしていて、県大会で好成績を収めたそうだ。タケルの運動神経の良さは自分から受け継いだのだと、時々自慢している。

佳奈はタケルの声を聞いてちらりと振りかえった。

「おかえり」

「あゝ、腹減った！」

「通知表は？」

「あゝ、腹減った！」

「返してもらったんでしょ」

「あゝ、腹減った！」

佳奈が片方の眉をつり上げて「こいつは……」という表情を浮かべる。まあ、予想通りなんだろうけど……という“つぶやき”がタ

ケルの頭の中に届く。

「あゝ、腹減った！ メシ、メシ、母ちゃん、メシ！」

タケルはわざとらしいくらい大げさに叫んだ。

佳奈はにやりと笑うと、タケルに人差し指を突きつけた。

「食事の前に見たらきつと食欲失くすような内容なんだろう。後でしっかり見せてもらうよ。覚悟しておきな」

タケルはとほほ……と頭を抱えた。

佳奈は一人で工務店と家の事をやりくりしている。男勝りでしっかり者だ。タケルの友人達の間では「細くてきれいなお母さん」などと言われているが、なんのなんの、肝っ玉母ちゃんという言葉は佳奈のためにあるのだと、哲司が時々口にするくらい、肝が据わっていて頼りがいがある。中身は男なんじゃないかと思うくらいだ。竹を割ったような性格で、裏も表もなく、とにかくさばさばしている。体育会系で鍛えられてきたからか、恐ろしく負けず嫌いだ。責任感と正義感の強さは相当で、間違っていると思ったら相手がヤクザでも注意しかねない。口うるさくてかなわない時もあるが、佳奈が一家の太陽であり、彼女がいなければ家も仕事も回らないというのは子供のタケルでもわかる。

「トーマはいつ来るの？」

佳奈はテーブルの上にそうめんを大盛りにした大皿を置きながらタケルを見た。

「六時くらいだつて。家の片付けしてから来るつて」

「えらいねえ。トーマは。お前も少しは自分の部屋、片付けな！」

佳奈に頭をはたかれそうになり、タケルは慌ててよける。

「明けても暮れてもサッカーサッカーって。ヘディングのしすぎでバカになったんだよ、きつと。バカにつける薬はないって言うけど、トーマの爪の垢でも煎じて飲んだら、少しはましになるかしら」

「腹壊します。……いてえ！」

べえつと舌を出した途端に佳奈に頭をはたかれた。

> 続  
<  
<

六時きつちりにトーマは川上家の前に到着した。インターホンを鳴らそうと指を伸ばした途端、玄関の扉が勢いよく開いてタケルが飛び出してきた。

「相変わらず早いね」

トーマが小さく口笛を吹き、タケルは胸をそらした。

「トーマがその角の辺りに来たくらいでわかる」

「だんだん範囲が広がってるみたいだね」

タケルには特殊な能力がある。どうやら生まれつきの力のようだった。

人の考えている事が“聞こえてくる”のだ。テレパシストというらしい。タケルにとっては当たり前のことだったが、大きくなるにつれてその力が他の人にはない、特殊なものである事がわかってきた。

トーマはそれこそ赤ちゃん時代から一緒にいるのでタケルのその力のことは知っていた。テレパシストという言葉を知ってタケルに教えてくれたのもトーマだ。

二人は「どれくらいの距離から“声”が聞こえるか」というのをよく試す。トーマがタケルに心の中で呼びかけながら歩いてくるのだ。そしてどの辺りで聞こえてきたかというのを調べる。

ゲーム感覚でやっているが、だんだんタケルの能力は強くなってきているようだ。聞こえ方も変わって来ていて、最初は波のように聞こえたり聞こえなかったりしていたが、最近ではかなりはっきりとした言葉で聞こえることが多い。

「ちよつとつつとつしいかも……」

タケルの表情が少し曇る。

「最近、授業中に気が散ってしょうがない」

外で身体を動かしている時にはほとんど気にならないが、じつと

しているとどうしても聞こえてくるのだ。同じ教室の中にいる友人達の様々な雑念がまるでテレビかラジオの音のように、さわさわと頭の中に響いてくる。

折しも思春期にさしかかってくる年頃だ。時には聞きたくないような内容の時もある。小さい時と違って、少しずつ皆の心の中も複雑になっていくようだった。あんまり真剣に耳を傾けていると、だんだん人間不信になるような気がするの、なるべく聞かないようにしようと思うのだが、なかなかうまくいかない。耳から聞こえてくる音なら耳栓をすればいいが、こういう声はどうすれば聞こえなくなるのだろうか。その術をまだタケルは知らない。

なんでこんな力が自分にあるのだろうかと時々思う。授業に集中できないのは勉強嫌いという理由だけではないのだ。今まで役に立った事と言えば、アユミが生まれたての赤ん坊の頃、彼女が何を欲しがっているかがなんとなく伝わってきて、それを佳奈に通訳してあげるくらいだった。

今のところ、この能力をちゃんと理解してくれているのはトーマだけだった。両親にすらまだ言ったことはない。打ち明けてみようかとも思うのだが、ふんぎりがつかないのだ。素直に受け止めてくれるか、それとも「同じつくならもうちょっとマシな嘘を言え」と怒られるか、はたまた「ヘディングのしすぎでついにおかしくなったか?」と病院に連れて行かれるか……。どっちにしても、試すにはかなり勇気がある。

「……きつと何かいい方法があるよ」

トーマはタケルの肩をぽんぽんと叩いた。僕が協力するから……そんな声がタケルの中に伝わる。トーマのあたたかい“声”が聞こえると何故かほっとする。

と、一転してトーマの顔にいたずらっ子のような笑みが浮かんだ。「ところで、どうだった? 今日は何発?」

そして楽しそうにタケルを覗き込む。

「五発。五年の三学期よりは一発少なかったな」

タケルは佳奈にはたかれた頭を大きさに撫でてみせる。痛いという程のものでもないのだが、ぼんぼん頭をはたから余計にバカになるのだと、タケルはいつも思う。よっぼどはたきやすい頭をしているらしい。

「トーマの爪の垢でも煎じて飲めってさ！」

「お腹壊すって」

「俺も同じ事言ったら、はたかれた」

二人は顔を見合わせて笑った。

> 続く <

夕方になって二人は自転車に乗って家を出発した。高乃城址公園までは自転車で十五分くらいだ。少し遠いが、タケルはサッカーの練習で毎週行っているので特に問題もない。

高乃城址公園の自転車置き場は既に八割くらいが埋まっている。そこに自転車を停めると二人は公園の中に入った。

公園の中央には高乃城神社があって、そこが昔の天守閣があった場所らしい。城を守るために作られていた堀の名残の池があり、その周辺は緑の豊かなビオトープになっていた。他にもサッカーや野球が出来るような広いグラウンドがあったり、遊具のある広場もある。日本庭園のようなスペースもあり、訪れる人は子供からお年寄りまで様々だ。ちなみにこの辺りの小学生は一年生の遠足でまずここに来るといのがお決まりだ。

遊歩道から神社の参道に入ると、道に沿ってずらりと露店が並んでいる。まだ辺りには日が残っているが、露店ごとに眩しいライトが灯されていて、白い光を参道に落としていた。自家発電のモーターの音が景気よく響いている。この音を聞くと、タケルは妙にそわそわしてしまう。

タケルは思いつきり鼻から息を吸い込む。綿菓子のような甘い匂いがするかと思えば醤油の焦げる芳ばしい匂いがする。匂いのおもちや箱のようだ。

「いい匂い……」

トーマもくんくんと鼻を鳴らした。いか焼きのソースの匂いがいきなりお腹を刺激する。軽く夕食は取っていたがこういうのはだいたい別腹だ。

「じゃ、さっそく行きますか！」

タケルがトーマの手をぐいっと引っ張って走り出した。

神社にたどり着くにはまっすぐ歩けば五分程度だが、あっちで食



べ、こつちで立ち止まり、と寄り道ばかりしていると、鳥居の下にたどり着くのに二十分ほどかかっていた。

「そんなにいっぱい持ってたからお参りできないよ」

トーマがくすくす笑う。タケルの右手には焼きトウモロコシ、左手にはリンゴ飴とベビーカステラの袋が握られている。タケルはまずどれを片付けるべきか、真剣に悩んでいる。

「とりあえず、トウモロコシ……だよな？」

タケルはきよきよと周りを見渡した。神社脇の木立の中にベンチが置いてあるのが見える。二人はそこへと移動した。

古びたベンチに腰をかけ、タケルはさっそくトウモロコシにかぶりついた。もりもりっという歯ごたえと醤油の味にタケルはうなる。「うっ、うまー！」

トーマは笑いながら自分の右手の袋を開け、中からタイ焼きを取りだす。

「昔はおもちやとか欲しいって思ってたけど、最近は食べることはわかりだね」

「なんでこう、すぐに腹すくんだらうな？」

ピカピカ光るおもちゃが欲しくて駄々こねて、佳奈によく怒られていた。父親がこっそり買ってくれるのだが、そういうおもちゃは大抵すぐに壊れてしまう。次の日にはゴミ箱に突っ込まれることもしばしばだった。今はとにかく食べ物や腹に突っ込む方がなによりも優先だ。

タケルはあつという間にトウモロコシを平らげて、醤油まみれの指をぺろっと舐めた。

「手、洗ってこよ」

「トイレこの辺にあつたっけ？」

「神社のさ、手洗うヤツあるじゃん」

「お清め用だよ、あれ」

トーマが苦笑いする。神社のお清めの水で醤油のついた手を洗って罰が当たったりして。

「醤油つて食い物だぜ。罰なんてあたんないって」  
タケルは口をとがらせた。

二人は揃って立ちあがると神社の方へと駆け出した。  
神社の中は橙色の柔らかな灯りを灯した提灯がたくさんつるされていた。遊歩道に立っている水銀灯の白い光と違って、随分と落ち着いた光だ。お参りをする人の数は結構多く、昼間の熱気の名残と人いきれで蒸し暑い。

境内の一角ではにぎやかな神楽 かぐら が流れていて、その前でハッピ姿の青年が飛び跳ねながら踊っている。地元の伝統芸能の踊りだそうだ。その周りには人だかりが出来ていて、携帯やビデオを撮る人もいた。

社務所前ではお守りやおみくじを求める人が並んでいる。まだ早い時間だがそこその人出だ。夜が更ける頃にはもつと混雑してくるだろう。

二人は人の間を縫うようにしながら参道の脇にある手水屋へと向かった。

手水屋の石造りの水槽はところどころ苔が生えていて、いかにも古そうだ。水槽の端には色のあせた龍の彫り物があって、その口からちよろちよろと水が出ている。

タケルはベビーカーとリング飴の袋をトーマに持ってもらって、うつぶせにおいてある柄杓を取ると、龍の口から流れる水を受け、手を洗った。

後ろに一步下がった時、むぎゅつと誰かの足をふんづけた。きやつという声が出て、タケルは思わずバランスを崩してよろめく。ふんづけた足の主と強く身体がぶつかりそのまま二人して尻もちをついた。

「ごめんなさい！」  
タケルは慌てて相手を見た。

> 続く <

長い黒髪の、同じ年くらいの女の子だった。

傍にいたトーマが慌てて駆け寄って、女の子を起こそうと手を差し出している。

尻もちをついた拍子に、肩から下げていたポシェットの中身が転がり出たらしく、携帯電話と財布が地面に転がっていた。丁度手を拭こうとハンカチを出したところにタケルとぶつかったらしい。

タケルは慌てて携帯電話と財布を拾い、ついた泥を自分のズボンでごしごしと拭った。そして慌てて立ちあがった。

「ごめん！ 大丈夫だった？」

女の子は顔をしかめて汚れたスカートを手で払っている。そしてタケルから携帯電話と財布を受け取った。

「……………ありがとう」

「けが、してない？」

「うん」

うつむき加減に頷くと、そそくさと人混みの中へと紛れて行く。人前でぶざまに尻もちをついてしまったのがよほど恥ずかしかったのだろう。

「悪いことしちゃった……………」

タケルは頭をかきながら隣のトーマを見た。

トーマはぼーっと女の子が消えて行った方を見ている。

「トーマ？」

タケルの中に、トーマの心のざわめきが伝わってくる。今までに感じたことのない、妙に浮ついた、ほのかにピンク色のざわめき…

…。

「トーマ？」

もう一度声をかけるとトーマははっと我に返った。

「タ、タケルは大丈夫？」

慌ててタケルの背中や膝を見る。トーマのやつ、何を動揺してるんだ？ タケルはきよとんとしながらトーマを眺めた。

決まりが悪くなったのかトーマはきよろきよろと視線を泳がせた。「ん？」

急にしゃがみこみ、何かを拾い上げた。立ちあがったトーマの手の中にはビー玉ほどの水晶玉と龍の彫り物のついた根付けが乗っていた。

「何？」

タケルが覗き込む。

「ストラップ？ えらく渋いな」

トーマは柄杓の水をかけて泥を落とした。水晶玉には小さな幾何学模様が彫りこまれている。家紋のようだ。

「根付けだよ。紐が違うだろ？」

確かに細い黒い糸のような紐ではなく、古びた細い組紐だ。千切れたようである。

「財布とかにつける、おまじないみたいなものだよ。……これって、もしかして、さっきの？」

トーマがタケルを見た。

「確かに財布、落としたよな。でもさ、子供が持つのに渋くない？」

「……まあ、確かに」

トーマは手の平に根付けを乗せてじっと見つめている。

「……でも、なんとなく、さっきの子の持ち物のような気がするんだけどな」

そう呟きながら、トーマは自分のポケットに根付けをねじ込んだ。二人はそのままなんとなく歩き出し、神社の方へと向かった。

人波に押されるように境内に入り、本殿の前にたどり着く。財布から賽銭を出そうとして、ほとんど露店で消えてしまったことを思い出し、タケルはぺろつと舌を出した。

「タダでも願ひ事、聞いてくれるかな」

「さあ」

トーマは笑いながら十円玉をタケルに渡してくれた。

申し訳程度に手を合わせると、参道から少し離れたところでベビーカーを口に放り込む。

「これ、アユミちゃんにお土産じゃなかったの？」

トーマが覗きこむ。

「こんなの食わせて、うっかり喉に詰めたらどうするんだよ！って母ちゃんがうるさいんだ。それにさ、まだ露店の食べ物食べさせないで！ってさ。俺には何食っても大丈夫！みたいな事いうくせに、アユには妙に細かいこと言うんだよ。ああいうのを猫かわいがりって言うんだろ？」

タケルは不服そうに唇を尖らせた。

「タケルだってアユミちゃんの事、充分猫可愛がりしてると思うけど。ちよつとすりむいただけでも大騒ぎしてるじゃん。自分はしょっちゅうズルむけで、だから流血してるのに」

「しょうがねーよ。かわいーんだから。ほれ、トーマ、食べ」

トーマの口に無理やり一つ押し込み、自分は続けざまに二つ三つとほおぼる。と、

「う……喉に……詰まった」

急に目を白黒させる。トーマが慌てて背中をぼんぼんと叩いてくれた。

「タケルが詰めてどうするんだよ。欲張りすぎなんだってば」

タケルはうぐうぐ（水、水）と言いながらさっきの手水屋の方へと向かって走り出した。

苦笑いしながら仕方なくついてきたトーマがあつと声を上げた。

手水屋のところにさっきの女の子の姿があった。下を見ながらきよきよと何かを探しているようだ。

「やっぱりそうだったんだ！」

トーマがタケルを追い越して走り出す。いつもは大人しいトーマが珍しいこともあるものだ。タケルは首をかしげて後を追った。

泣きそうな顔で足元を覗き込んでいる女の子にトーマは声をかけ

た。

「あの！」

はっと顔を上げた女の子と視線が合った途端に、トーマは急におどおどし始める。

追いついたタケルは柄杓で水を飲みながら、トーマと女の子を交互に見比べた。

それほど明るくない中でもはつきりとわかるくらいトーマは耳まで真っ赤になりながら、上を見たり下を見たり、女の子を見たりタケルを見たりしながら、あの、その、と言葉を探している。じゅわ〜と頭のとっぺんから湯気でもたっているのではないかとタケルは心配になってきた。

それとは対照的に、女の子の方は不安げな表情でトーマとタケルを見ている。と、タケルの心の中に奇妙な不安感が津波のような勢いで伝わってきた。あまり普段感じたことのない感情の波だ。強い警戒心と怯え。まるでライオンの視線を恐れる草食動物のそのようだった。よほど人見知りの強い子なのだろうか。

「あのさ、もしかして、さっき、ここで落し物した？」

トーマがあまりおどおどして話が進みそうにないので、仕方なく、タケルが口を挟む。

「え……うん」

女の子がためらいながら頷く。

「それって、ストラップみたいなヤツ？」

タケルはトーマを肘でつついた。はっと我に返ったトーマは、慌ててポケットからさっきの根付けを取り出した。

「これ」

「あ」

女の子の顔がぱつと明るくなる。

「良かった。あった」

トーマがおずおずと手を伸ばした。女の子の手の平にそっとそれを置く。

「大切なものだったの。良かった、あつて」

「俺がぶつかつたから……。ごめんね」

タケルはそう言つて改めて女の子を見た。トーマがドキドキする訳がようやくわかつた。

提灯の明かりに浮かびあがる顔立ちは、びつくりするほど色白で整つていた。可愛いというよりは綺麗と言つた方がいい。それも日本的な、透き通つたような綺麗さ。この子なら、さっきの古風な根付けを持っていても不自然ではないと思わせるような。きつと、着物が似会つに違いない。深い湖を思わせるような不思議な瞳をしていた。こんなに綺麗な子は見た事がない。

が、色気より食い気の方が優先しているタケルはあっさりと視線をトーマに移した。

「トーマ、そろそろ行こうぜ」

固まっているトーマの肘を引つ張る。

「あの！」

女の子が思いきつたように口を開く。

「北口の方に行きたいんだけど……道がわからなくなつて」

タケルとトーマは顔を見合わせた。確かにだだっ広いが、それほどわかりにくい公園ではない。地元の人間なら滅多なことでは迷子にはならない。

「ここ、初めて？」

「……うん」

女の子は小さく頷いた。

「い、いいよ！」

トーマが素つ頓狂 すつとんきょう な大声を出す。

「僕たちが、お、送っていくから」

「え？」

「どうせ僕達ももうじき帰るし！ ね、タケル！」

え？ 今来たところじゃん。まだトウモロコシとベビーカステラしか食つてないし。タコ焼きとミルクせんべいも外せないでしょ。

あ、そっぴや俺の財布は空だった。いやいや、トーマはまだいくらか残ってるはずでしょ。タケルはそう反論しようとしたが、トーマは既に先頭に立って歩きだしていた。

トーマのヤツ、何舞い上がってるんだ??

タケルは心の中でぶつぶつ呟きながら二人の後を歩き出した。

女の子は不安そうに時々人混みの中へと視線を走らせる。誰かを探しているようにも見えた。そう言えば最初に声をかけた時にも妙に怯えた様子だった。

なんだろう、何をそんなに怖がっているんだろう。迷子になったという不安感だけではなさそうだ。

「ここ広いから、初めてきたら迷子になるかもね」

タケルは二人に並ぶと声をかけた。あまりにも不安そうなので可哀そうになってきたのだ。

「今日は人も多いしね。でもそんなに複雑な場所でもないから、昼間だったら大丈夫だよ」

「よく来るの?」

「俺はサッカーの練習で毎週来る。トーマはビオトープで虫見たりするのにしょっちゅう。な、トーマ」

タケルはトーマを見た。トーマは赤い顔をしたまま視線を合わせずうんうんと頷いた。

「ビオトープがあるんだ」

女の子の声が少し明るくなる。

「虫好きなの?」

トーマがやつと女の子を見た。クラスの女子などは虫と言っただけじゃあきやあ大騒ぎする。

「好き……という程でもないけど、怖くはないかな。慣れてるから」

「へえ、珍しいね。ここのビオトープ、いいよ。糸トンボもいるんだ」

「へえ、こんな街なの?」

トーマの目が急に輝きます。ほら、来たぞ。虫の話になると急に



スイッチが入るんだ、こいつは。タケルはおかしくなつてにやにやした。

初めて出会った女の子相手に糸トンボについて熱く語りだす。

トーマは優しいし、大人しいし、とんでもなく頭が良いから、女子からも好かれそうなものだが、案外人気がない。あんまりにも興味が偏っているのだ。テレビで見るのはニュースとかドキュメントとか、動物や昆虫物ばかりで、アイドルやらスポーツやらには全く興味が無いようだった。だからクラスの女子とはほとんど共通の話題がない。うっかりクラスの女子に虫の話なんかしようものなら、十秒で逃げられる。もつともトーマにとって、そんな事はどうでもいいようで、おかしくなるくらいマイペースに自分の興味を追求していく。良く言えば学者、悪く言えばオタクといったところか。

が、今日は少し様子が違うようだ。意外な事に女の子はうんうんと熱心にトーマの昆虫談義を聞いている。それもかなり興味深いような手ごたえだ。さらに驚いた事には、彼女の心の中の不安感だんだん小さくなってきているようだった。世の中には不思議なことがあるもんだ。と、タケルは感心した。

露店の続く道から枝分かれしている遊歩道の方へと向かう。北口に向かう道は帰る人よりも来る人の方が多い。まだまだ宵の口だ。これから祭を楽しもうという人達だろう。

「この近くに住んでるの？」

女の子がトーマに尋ねる。

「自転車で十五分くらい。君は？」

「……家は遠いんだけど」

一瞬口ごもる。そのわずかな時間にタケルの中に“声”が響いた。

なんて答えたらいいんだろう……。ヒノオとは関係ない人達だとは思っけど……。

それは明らかに焦っているといった様子だった。タケルははつと

して女の子を見た。ヒノオ？ なんの事だろうか。

「親戚の家に遊びに来てて……。夏休みだから……」  
慎重に答えを選んでいようだった。

トーマは女の子の心のぶれにはまったく気がつかず、楽しそうにしゃべっている。女の子の心もまた穏やかになり、トーマとおしやべりを楽しんでいるようだ。

なにやら訳がありそうだ。ただの綺麗な女の子……。そんなものではないような気がしてならない。この子は何かが違う。そんな思いがざわざわと心の表面を撫でて行く。それはトーマの心のざわめきとはまた違う戸惑いだった。予感と言った方がいいのかもしれない。  
「そうだ！」

トーマの大声にタケルははっと我に返る。

「明日、僕ビオトープに行くつもりしてるんだけど、一緒にどう？」  
トーマのセリフに思わず目をむいた。トーマが女子を誘っている？ なんだ、なんだ、この展界は？ トーマが女の子をナンパしている！？

「タケルも行くんだよね？」

トーマは強い口調で言いながらタケルを見た。その目が、「頼むから、うんって言うて！」と懇願している。

「え？ う、うん」

そんな約束はしていなかったはずだよ……。タケルはとまどいながら勢いに負けて頷いてしまった。

「え？ いいの？」

「もちろん。高乃城の案内してあげるよ。ね、タケル！」

「う、うん」

なんだこの積極性は……。タケルはあっけにとられてトーマを見る。

三人は北口にたどり着いた。広い道路の向こう側から誰かが叫ぶ。  
「琴音ちゃん！」

女の子ははっとした顔で声の方を見て、ペロツと舌を出した。

「親戚のおばさん。見つかった」

そして二人に向かって丁寧に頭を下げた。

「どうもありがとう。……明日、本当にいい？」

「もちろん。じゃあ、ここで。午後は暑いから、午前中がいいよね。十時とかでもいいける？」

「うん。……ええつと、名前は」

女の子は二人の顔を見比べた。ああ！ と、トーマは声を上げる。

「僕トーマ。こっちがタケル」

そして右手を差し出した。女の子はびっくりしたようにその手を見ていたが、ふっと笑みを浮かべた。

「私、琴音」

トーマの手をふわりと握り、そしてくるりと踵を返した。

「じゃあ、また、明日！」

琴音というその少女は小走りに声の主の方へ向って走り出した。

交差点を渡ったところに若い女性が琴音を待っていた。勝手に家を抜け出した事を叱っている声が微かに聞こえてくる。

「琴音って言うのか……綺麗な名前だな」

トーマがぼそつと呟いた。遠くに見える琴音の後ろ姿と、上気した顔で見送るトーマを、タケルはきよとした顔で交互に見比べた。

> 続く <

誘拐

& l t ; i & g t ; (前書き)

タケルとトーマは夏祭りの夜に琴音という美少女と出会う。ひと夏をこの町で過ごすためにやってきたという。タケルは琴音の心の中の影に気がつくが、トーマはこの美少女に一目ぼれをしてしまったらしい……。

誘拐

&lt; ; 1 &gt;

祭から一週間が過ぎた。

タケルはこのところ毎朝トーマの襲撃で起こされる。

八時前にはトーマが家にやってきて、タケルを叩き起こし、無理やり宿題をやらされ、十時前にはトーマに公園に連れて行かれる。

夏休みの自由研究と称して毎日のようにビオトープに虫の観察に行く。しかし、虫の観察というのは表向きで、なんの事はない、そこで祭で出会った美少女、琴音と会うのだ。

正直タケルはどうでも良かったのだが、トーマの変貌ぶりがおかしくて、ついつい付き合ってしまう。トーマの浮かれっぷりはただ事でなく、毎日うきうきしているのは一目瞭然だった。ようするに一目ぼれというやつだ。

琴音はタケルやトーマと同じ六年生だった。夏休みを高乃城の親戚の家で過ごすという。住まいは東京だということだった。

今時の女子にしては珍しく、トーマが採った虫を興味深そうに覗きこんだり、触ったりする。

「怖くない？」

トーマが遠慮しながら小さなアマガエルを見せた時も、にこにこしながら、

「全然。かわいい」

と、自分の手のひらに乗せてみせた。

「今の学校に来るまではしょっちゅうこんな事してたから。久しぶり」

「今の学校ってことは、引っ越しして東京に？」

トーマが何気なく尋ねると、琴音の顔に一瞬戸惑いの色が浮かんだ。

「……うん。とんでもない田舎から東京に来たから……。すごくびっくりした!」

すぐに明るい口調に戻ったが、タケルはちらりと琴音の横顔を見た。

トーマは気がつかなかったようだが、一瞬、琴音の心が動揺したことがタケルに伝わってきたのだ。

タケルは二人から少し離れたところでリフティングの練習をしながら考えていた。

琴音には何か秘密があるに違いない。それが何かはわからないが、どうやら他人にはあまり知られたくない事である事は確かだった。

この一週間、琴音の様子を見ていたが、時々琴音から不思議な波を感じるのだ。それは自分が予期していないような質問をされた時や、びつくりした時などに伝わってくる。その波は今まで周りの人間、家族やトーマ、クラスメートがびつくりした時などに感じるものとは全く質の違ったものだった。

その違和感は少し危険な匂いがする。動物的な直感とでも言うのだろうか、理由はわからないがタケルの中の本能の部分がそうささやいているような気がしていた。

タケルの不安をよそに、トーマはどんどん琴音に引き寄せられていく。それが手に取るようにわかるだけに、タケルは自分の不安をトーマに言えないのだ。こんな事をいつたらきつとトーマは怒るだろう。自分にとって大切な兄弟のような親友を怒らせるのはこわかった。今のタケルにとっては誰よりも信頼できる友達なのだ。

「タケルくん！」

琴音の声にはっと我に返る。いつの間にかトーマの姿が消えていて、琴音がタケルの傍に立っていた。

「あれ？ トーマは？」

「お手洗いだって」

タケルは地面に転がっていたボールを右足でひょいとすくい上げ、手で受けた。

「すごい」

琴音が目を丸くする。

「ジャグラーみたい」

「いやあ、それほどでも」

さっきまでの琴音に対するほのかな不安はどこへやら、タケルは思わず照れる。おだてにはからつきし弱いのである。

「サッカー上手いのね。もう随分長くやってるの？」

「サッカークラブに入ったのは一年だけど、保育園の頃から父ちゃんとボール蹴りやってたかな」

「じゃあ、将来はサッカー選手だ」

「うん、ま、なればいいけどね」

タケルはボールを地面に落とし、軽く蹴りながら日陰へと移動した。そこに腰をかけると琴音もその隣に腰を下ろす。

「琴音ちゃんはスポーツとか得意な人？」

「……だめ。どんくさいっていつも笑われる。ぼーっとしてるから、周りのスピードについていけないの」

琴音は小さく笑うと肩をすくめた。

「小さい頃から、あんまり同じ年頃の友達がいなかったんだよね。」

小学校に入ってから、なんか上手く話せなかったりで……。だからトーマくとタケルくんがすごくうらやましい……」

「……そうなんだ」

琴音の顔には寂しそうなほほ笑みが浮かんでいる。大人の女ならともかく、十二歳の子供には似つかわしくないほほ笑みだ。その途端に、タケルの脳裏に映像がフラッシュのようにちらつく。

小さな子供達が遊んでいるのを少し離れたところから眺めている琴音。一緒に遊んでいる友達を大人が慌てて連れて行ってしまふ。まるで琴音から逃げるかのように……。

頭の芯がちりちりと痛む。タケルは思わずこめかみを押さえた。

「大丈夫？」

琴音がびっくりしたように覗き込む。

「大丈夫……。太陽に当たりすぎたかな」

タケルはとつさにその頭痛を太陽のせいにした。見てはいけな  
ものを見た、琴音に悪い事をした、そんな気持ちが湧きあがって  
くる。

「ずっと直射日光に当たってるからよ。頭冷やす？」

立ち上がりかけた琴音を慌てて止める。

「大丈夫大丈夫。これくらいなれてるから」

そお？ と琴音は心配そうに再び腰を下ろした。

「ねえ、試合とかがつてよくあるの？」

琴音はふいに明るい口調で聞いてきた。

「うん。しょっちゅうある。練習試合とか交流試合とか、毎月なん  
かあるね。公式試合だけでも年に五、六回はあるかな。そっぴや、  
次の日曜日も試合だ」

隣の市のサッカーチームとの交流試合だ。

「出るの？」

「うん。一応レギュラーだからね」

ちよつと自慢気にタケルは鼻の下を指でこすつた。実際、選抜メ  
ンバーの時でもたいていはレギュラーに入っている。今度の試合は  
チームの六年生が全員出場する予定なので、当然タケルも入ってい  
る。

「ここのサッカーグラウンドでするんだ」

タケルは木立の向こう側を指さした。へえ〜つと言いながら琴音  
が指の方を眺めた。

「一度見てみたいな。サッカーの試合」

琴音のつぶやきを聞きながら、タケルの視界にトーマが小走りに  
戻ってくるのが見えた。

「じゃあ、トーマと一緒に見に来る？ でも、言っとくけど、暑い  
よ」



「うん！」

琴音は嬉しそうに言うと、トーマに向かって手を振った。トーマが少し離れたところから顔を上気させながら手を振り返した。

> 続く <

日曜日は曇っていて、午後からは雨が降るという予報だった。タケルは一人でグラウンドへ来て、ウォーミングアップをしていた。試合は十時からだが、一時間前には来てウォーミングアップするのが習慣だ。

軽く身体を動かしていると、いい感じでエンジンがかかってくる。リフティングを何回かしてから高くボールを上げて、胸に当てて落とす。

軽くドリブルをしながらゴールに向かって蹴りこむ。

ボールは高く上がって綺麗な弧を描き、ゴールネットを揺らした。

「まあまあだな……」

タケルは呟くと自分のボールを取りに行く。蒸し暑い天候だが、身体の動きはまずまずといったところだ。

コーチが集合の号令をかける。

そろそろ試合が始まるようだった。タケルは自分のボールを足で軽く蹴りながらチームメートの元へと向かった。

「今日も頼むぞ、タケル！」

チームメートがタケルの尻をポンと叩く。タケルは自信ありげな表情で親指を立てた。

センターラインに沿って選手達が並ぶ。

夏の重い空気を切り裂くように、鋭いホイッスルの音が鳴り響いた。

トーマは北口の花壇の縁に腰をかけ、琴音を待っていた。待ち合わせ時間は十時だったが、既に二十分が過ぎている。

「どうしたんだろう……」

腕時計をちらちら見ながら、落ち着きなく辺りをきよるきよると見回す。途中で事故にでもあったんじゃないか……などと、そんな

不安まで湧きあがってくる。

「あ、来た」

思わず立ち上がる。交差点の向こうで琴音が手を振っている。信号が青になると、駆け足でこちらに向かってきた。

「ごめんなさい、遅くなっちゃった!」

琴音は息を切らしながら両手を合わせて謝った。

「うん、大丈夫だよ。そんなに待ってないし」

デートで待たされた男が口にする常套句だ。トーマにとっては二十分待たされたことよりも琴音が走って来てくれた事の方が嬉しい。「このところ出歩き過ぎって、おじさんに注意されたばかりだったから、家を出るタイミングがなかなかつかめなくて」

親戚の家に滞在中という琴音は、外出する時、どうやらその親戚の目を盗んで家を出てきているようだった。よほど良家のお嬢さんなのだろう。

「大丈夫なの？ 怒られない？」

「うん。怒られることはない。…….と思う」

琴音はぺろっといたずらっ子のように舌を出した。

「じゃ、行こうか」

「うん」

二人は公園の遊歩道を歩きだした。

二人の姿が消えるのと入れ違いで一台の黒い車が北口の前に停車した。後部座席から男が二人降り立つ。一人はまだ若い、二十代前半だろうか、鋭い目をした男である。もう一人は五十代くらいの痩せた、陰気な目をした男だった。

「間違いないな」

「はい」

二人は顔を見合わせると小さく頷いた。

> 続く <

トーマと琴音がグラウンドにたどり着くと試合は既に始まっていた。白いゼッケンのチームと、青いゼッケンのチームが激しくボールを奪いあっている。

サッカーグラウンドを取り囲んでいるコンクリートのひな壇の一番上の段に二人は立って、白と青が入り乱れて動き回っているコートを見た。

「どっちがタケルくん？」

「確か今日は青色って言ってたけど……」

トーマはきよろきよろと視線を走らせる。

「あ、あれ、あれ。今ボール蹴って走ってる」

トーマが指を差すと、琴音は声を弾ませた。

「わあ、速い。すごい、タケルくん！」

タケルは鋭い動きで右左に方向を変えながら、たくみにボールを運んでいく。

「後ろにボール蹴った！　すごい。なんで後ろに仲間がいるってわかるんだろ。それもあんな全力疾走で走ってて」

琴音は目を丸くする。トーマは笑いながら腰を下ろした。琴音もそれにならう。

「だいたいわかるって、タケルが言ってた」

タケルは他の人よりも勘が良い。それは彼の特殊な能力の影響もあるのだろう。

ゲームは前半が終わりそうだった。まだ双方とも無得点だが青チームが少しばかり押しているようだ。

琴音はサッカーのルールをよく知らないようなので、トーマは解説を入れながら一生懸命応援した。

二人ともすっかり試合に熱中していたので、背後に人の気配がしている事に全く気がつかなかった。

いつの間にか男が二人立っている。北口から二人をつけて来た男達だった。

「琴音さん」

若い方の男が目の前で琴音に声をかけた。

琴音の動きが一瞬止まる。

「探しましたよ」

男の声はぞつとするとするほど冷たく、ひとかけらのぬくもりも感じられない。

トーマはようやく後ろの二人の存在に気が付き、慌てて振りかえった。二メートルと離れていない所に男が二人立っている。手を伸ばせばすぐにでも届きそうだ。

琴音は振り向かずにつつくりと立ちあがる。

「こ、琴音ちゃん？」

トーマも思わず立ちあがった。そして琴音と二人の男を交互に見る。両者の間に流れる空気はとても親密なものとは言えない。

琴音は振り向くことなく口を開いた。

「……しつこい。私は帰らないと言ったはずよ」

その声は今までに聞いた事がないほど冷たく強い口調だった。トーマはびっくりして琴音の横顔を見る。

うつむき加減で半眼になり宙を見つめている。両手は固く握りしめられ、小さく震えているほどだった。今のままで無邪気にタケルの応援をしていた琴音ではない。まるで別人のようだ。

「あなた達のバカげた計画に興味はない。でも、お兄様の手助けもしない。とにかく、これ以上は関わりたくない。何度も言わせないで下さい」

琴音の身体から怒りが霧のように立ち上っているのがわかる。人間がこれほど静かに怒りを燃え上がらせる事が出来るなんて、今まで考えた事もなかった。

気圧されたトーマは思わず二三歩、下がる。

「待ちなさい」

もう一人の男が穏やかに声をかけた。

「すぐにブチ切れて怒りを撒き散らすのはいい加減に押さえなさい。そろそろ制御する事も覚えたはずだ。そのための東京生活だったのだからね」

男はじりじりと琴音に近づいてくる。

「こんなところでのんきにサッカー観戦している御身分ではないことは、自分が一番よくわかっているだろう。君には担うべき役割がある。それが君の宿命だ」

「聞きたくない！」

琴音が叫んだ。

一瞬何か熱いモノが勢いよく放射状に琴音からはじき出されたように感じた

思わずトーマはよろめく。

その手を男がぐつと掴んだ。

「わ?!」

そしてそのまま自分の方へと引き寄せ、トーマの首に腕を巻きつけた。

「やめなさい！ 君のボーイフレンドが黒こげになってもいいのかわか？ ここは大人しく私の言う事を聞く方が賢いと思わないかな」

トーマは首をぎりぎり締めあげられ、もがいた。細くて貧相な体つきのくせに、男の力は強く腕はなかなかほどけそうにない。

頸動脈が締められて、頭が熱くなってくる。

なにがどうなっているのかわからない。が、とにかく信じられないくらい、危ない状況になっているのだけはわかる。そしてこのままでは取り返しのつかない事になりそうだ。

「く、くるしい……」

トーマは死に物狂いでもがいた。トーマの悲壮な声に初めて琴音が振り向く。

「トーマ……くん」

ふいに琴音の瞳の表情が見慣れたもの変わる。

「根岸さん、やめて！」

「いやいや、この少年は私達の盾だ。どうやらこの子がいれば、君は自制してくれそうだからね」

「卑怯者……」

琴音の瞳に殺気立った光が宿り、きりきりと怒りが再び高まる気配がする。

「やめなさいと言ったろ？」

根岸の腕は再びトーマを締めあげる。トーマは真つ赤な顔でもがいている。

「言っておくが、私は平和主義者でね。人が苦しむのを見たいとは思わないんだよ。でも、君があんまり言う事を聞かないと保証はしない」

「……」

琴音は根岸というその男を睨みつけていたが、やがて静かに目をつぶった。トーマの身の安全には代えられない。そう思ったのだから。

「さあ、そろそろ行くか」

琴音があきらめたのを見てとった男は若い男の方を見た。若い男は小さく頷くと琴音の横に立ち、その腕をつかんだ。琴音はその腕を払いのけ、きつい視線で男を睨みつける。一瞬男がひるんだが、トーマのうめき声に琴音ははっと我に返ったようだった。

「行きましようか、琴音さん」

男は再び琴音の腕を掴み、ぐいっと引っ張った。

グラウンドで前半終了のホイッスルが鳴り響いた。タケルはボールを追いかけるのを止め、ベンチに向かう。頭から水をかぶったように汗が流れている。目に入りそうになった汗を腕でぬぐった時だった。

頭の中に“声”が響いた。

タケル！ 助けて！ 殺される！

> 続く <



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1190y/>

---

タ・ケ・ル

2011年11月7日12時02分発行